

RAFP 療法の有効率は50%で、AA 例に有効例が多かった。AA では6例が1年から5年9カ月生存中で、5例が再発なく useful life を送っている。5例が既に死亡したが、3年以内の死亡は1例であった。GB は予後不良で9例中7例が3年以内に死亡したが、1例は3年6カ月良好に経過している。他の1例は治療時9歳で、1年9カ月後より CT 上照射野に一致した低吸収域が出現し、再発はないが現在寝たきりの状態である。10歳未満の症例では、照射方法や照射野の設定に注意を要すると思われた。

A-100) 悪性脳腫瘍に対する INF- β の使用経験

森山 隆志・椿坂 英樹 (弘前大学医学部
脳神経外科)
岩淵 隆
齋藤 和子・中村 公明 (青森県立中央病
院脳神経外科)
田中 輝彦

悪性脳腫瘍の化学、免疫療法として、最近 INF- β が使用されてきているが、我々の施設においても、この2年間で18例の悪性腫瘍に対して INF が投与された。組織学的には、髄芽腫、膠芽腫及び悪性星細胞腫であった。

INF は、総投与量、約 10×10^6 単位から 500×10^6 単位で、静脈内或は髄腔内投与とし、原則的に手術後 1×10^6 単位から開始し、 $6 \times 10^6 \sim 12 \times 10^6$ 単位の連日ないし間欠投与を行なった。また放射線療法、その他の化学療法も随時併用した。

副作用としては、発熱、悪寒、骨髄抑制、肝障害、消化器症状等が見られ、中に消化器症状が強く使用中止した症例もあったが、概ね投与継続が可能であったものの、投与の工夫を必要とした。

結果は、CT 上から、CR 1例、PR 3例、NC 8例、PD 6例で、有効率は、22.2%であった。この結果を有効群、無効群及び臨床上有効であったが判定基準からは無効 (NC) とされる3群に分類し、それぞれの群についての特徴等について若干の検討を加えた。

A-101) 再発悪性グリオーマに対する hyperfractionated radiotherapy の効果

増山 祥二・片倉 隆一 (東北大学医学部
脳研脳神経外科)
北原 正和・高橋 康
吉本 高志・鈴木 二郎
高井 良尋 (同 放射線科)

我々は従来悪性グリオーマに対して手術療法に加えて放射線化学療法を行ってきたが、再発症例も少なくない。そこで最近我々は再発悪性グリオーマに対し、1回1.2

～1.5Gy で一日に2回照射を行う、いわゆる hyperfractionated radiotherapy を試みている。これは、分割1回線量を少なくし、従来とほぼ同じ治療期間でより大きな総線量を照射する目的で行うものである。症例はいずれも再発悪性グリオーマで、8例に対し9回の治療を行った。その病理組織所見は、glioblastoma 2例、anaplastic astrocytoma 5例、malignant ependymoma 1例であった。照射法は、2例3回の治療では1回線量1.5Gy を1日2回、6例は1回線量1.2Gy を1日2回、いずれも最低4時間以上の間隔をあけて照射した。その結果、CT 上2例では CR、5例で PR、2例では NC であった。長期予後もまだ不明であるが、全症例とも一時症状の改善を認めている。また症例数も少なく、有効か否かの判断ははっきりしないが、今後もっと症例数を増やし検討していく予定である。

B-1) 広範な被膜内石灰化を伴った陳旧性脳膿瘍の1例

立花 修・林 裕 (黒部市民病院
脳神経外科)
沖 春海

頭蓋内異常石灰化の原因の1つとして炎症性疾患は重要であるが、脳膿瘍後の石灰化の報告は散見されるのみである。我々は陳旧性脳膿瘍後の広範な被膜内石灰化を伴った一例を経験したので報告する。症例は57歳、女性。意識消失発作、頭痛にて来院。既往歴として、4歳時に右中耳炎にて乳様突起切開術を受け、以後耳聾である。入院時、両側視力低下、左同名半盲、両側視神経萎縮を認めた。頭蓋単純撮影にて、右錐体骨より頭蓋内へ伸展する 5×4 cm の巨大な石灰化像を認め、CT スキャンより cystic lesion であることがわかった。右側頭頭頂開頭にて腫瘤を一塊として摘出した。腫瘤は右錐体骨上面外側部より連続し、また硬膜との連続性もあり極めて強い結合をしめた。腫瘤は3～7mm の殻状壁を有する cyst であり、内腔は黄褐色クリーム状物であった。病理組織では、腫瘤壁は細胞成分がほとんど見られない線維性組織で cyst 側に石灰化を広範に伴った層を認め、その境界部には calcified deposits がみられた。血管様構造はほとんど認められず、大食細胞はわずかしかなか、被膜内石灰化陳旧性脳膿瘍と診断した。

B-2) 大脳半球間裂部硬膜下膿瘍と小脳膿瘍の合併例の一治験例

渡辺 達雄・相場 豊隆 (竹田総合病院
脳神経外科)
小山 京

硬膜下膿瘍は頭蓋内膿瘍の 1/4~1/5 の頻度で見られるが、大脳半球間裂部硬膜下膿瘍の報告は CT 時代になっても稀である。最近我々は、大脳半球間裂部に限局する硬膜下膿瘍と小脳内膿瘍の合併例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。症例：13歳男子。発熱・頭痛にて発症し、扁桃腺炎の診断で治療中、左下肢の脱力を生じた。髄液は好中球優位の細胞増多をみとめ、CT では大脳半球間裂部のうすい低吸収域をみとめた。抗生剤投与にもかかわらず症状は軽快せず、痙攣が頻発し、意識障害および両側外転神経麻痺が加わった。発症19日目の CT で、大脳半球間裂部から左テント上にかけて低吸収域が著明に増大しており、周囲の造影剤増強効果のみとめた。又右テント下にも周囲が増強される低吸収域をみとめた。手術は、左後頭傍矢状部と右後頭下に小開頭を加えて排膿した。前者は厚く丈夫な被膜をもつ硬膜下膿瘍であり 125ml、後者は小脳内の膿瘍で 10ml の淡黄色、無臭の粘稠性膿を得た。約 1 ヶ月で症状はほぼ軽快し退院した。膿の培養からは *corynebacterium* が検出された。

B-3) Lymphocytic hypophysitis の 1 例

蕎麦田英治・引地 基文 (弘前大学)
相馬 正始・岩淵 隆 (脳神経外科)

Lymphocytic hypophysitis は、下垂体前葉におけるリンパ球の慢性浸潤を特徴とする炎症性疾患である。報告例は渉猟し得た範囲で31例と極めて少なく、全例が女性である。妊娠や分娩との関連が強いが、6例は無関係に発症している。病因としては自己免疫機構の関与が考えられている。今回我々は、組織学的に本疾患と考えられた一例を経験した。症例は24才女性、18才頃より体重増加、皮膚の色素沈着、多毛傾向を認めた。初潮は12才、最近一年間は amenorrhea が続いている。妊娠、分娩の既往はない。口渇、多飲多尿、頭痛を訴えて入院。身長 145.5cm、体重 87kg、血圧は 130/80mmHg。尿糖 (+)。内分泌学的には下垂体機能低下を認め、CT で鞍上部伸展を示すトルコ鞍部腫瘍 (CE+) を認めた。経蝶形骨洞的に摘出を行った。腫瘍は黄灰色で硬く、組織学的所見では腫瘍性的変化はは無く、濾胞様構造を形成しつつ慢性に著明なリンパ球浸潤がみられ、少数の形質細胞や好酸球を混じていた。下垂体実質の細胞成分は著明に減少していた。以上の所見から lymphocytic hypophysitis が考えられ、現在自己抗体について検索中である。

B-4) 長期抗生物質投与中においてみられた難治性大腸炎について

小助川 治・大滝 雅文 (札幌医科大学)
森本 繁文・上出 廷治 (脳神経外科)
端 和夫

木村 弘通・氏家 良人 (札幌医科大学)
集中治療部 (ICU)

偽膜性大腸炎をはじめとする抗生物質関連大腸炎は重症患者に発生する場合は予後不良で、予防あるいは初期治療が極めて重要となる。

1987年5月より1988年2月まで札幌医科大学脳神経外科にて抗生物質の投与が原因となった抗生物質関連大腸炎5例を経験した。患者はいずれも男性で、35才より70才まで分布している。症例のうち3例は内視鏡所見により偽膜性大腸炎と確定診断できた。他の2例も、偽膜性大腸炎と確定診断は得られなかったものの、腹部膨満・緑色泥状便・粘血便・粘液便などの臨床所見から抗生物質関連大腸炎と考えられた。5例中3例は、敗血症を併発し死亡した。

抗生物質投与中腹部膨満を放置すると、偽膜性大腸炎から敗血症を併発し多臓器不全の病態をとり、極めて予後不良の経過をたどることがある。その対策としては早期診断・初期治療が重要である。我々の5例とともに本大学 ICU で経験された腹部膨満症例39例とを検討し、早期臨床症状の特徴を明らかにするとともに、治療法について若干の知見を得たので報告する。

B-5) 棘波・鋭波の合成ダイナミック・トポグラフィ

三浦 俊一・米谷 元裕 (秋田大学)
後藤 恒夫・古和田正悦 (脳神経外科)

脳波・誘発電位の研究に各種のトポグラフィが臨床応用されて脳機能の解明に貢献しており、てんかん脳波においても定量的解析が行われて2次元または3次元表示が試みられるようになったが、解析法や処理技術でなお検討すべきことが少なくない。今回、棘波および鋭波の形態上の経時的変化を等電図とともに表示する合成ダイナミック・トポグラフィを作成し、主として部分てんかん例に応用しているので報告する。

波形の形態評価は①上昇スローブと下降スローブの比、②上昇スローブ後半と下降スローブ前半の比、③上昇スローブの持続時間と下降スローブの持続時間の比を求める3方法で行い、それぞれの測定結果を比較検討して相関を求めた。①と③の間で高い相関が得られたので、主に③の測定結果を統計処理し、形態評価のクライテリア